ジェイムズ・ホッグ

15　ファイフの魔女女房

『女王の祝祭』より８番目の吟遊詩人のうた

「一体どこにいたんだ　困った女房(やつ)だ
　三日も家に帰らずに
なぜ　潮をふいたように
　額に汗を浮かべてるんだい

ちょいとお目にかかれぬような　5
　いい男にでも出会ったか
刻(とき)を告げる灰色の雄鶏も
　啼(な)かぬところにでも行っていたのか

だが魔法は解け　轡(くつわ)は壊れるもんさ
　そうなりゃお前さんもつらいだけ　10
かわいい赤ん坊や俺といっしょに
　家で寝てりゃいいものを」

「まあお座りよ　お人よしのお前さん
　座って話を聞いておくれよ
髪は逆立ち　15
　冷や汗で目も曇る話だよ

他に漏らしちゃいけないよ　お人よしのお前さん
　一言だって　漏らしちゃいけないよ
そんなことすりゃ　ひどい目にあわされて
　長く苦しむことになるはずさ　20

最初の暗い晩　空には新月が細くかかり
　あたりは静まり返り　真っ暗さ
あたしらは月明かりに光るシダの葉を馬にして
　キルマリンの教会から駆けたのさ

あるものはエニシダの馬を駆り　25
　あるものは緑の月桂樹の馬を駆る
あたしが乗るのは毒ニンジン
　そりゃあ立派に駆けたのさ

あたしらはキツネに乗って山を降り
　ツバメに乗って丘を越え　30
フクロウが息をきらすまで追い回し
　空から落としてやったのさ」

「それがどうした　困った女房(やつ)だ
　それがどうしたってんだ
かわいい赤ん坊や俺といっしょに　35
　家で寝てりゃいいものを」

「あたしらは駆けまわったのさ　ご機嫌で
　漆黒の暗闇をぬけ
海を渡り　森を縫い
　やっとローモンドの丘にたどり着いたのさ　40

ローモンドの丘に着くと
　軽々馬から飛び降りて
角にならない角から
　ビールにならないビールを飲みほした

すると　小っちゃな小っちゃな男が　45
　灰色の苔生(こけむ)す石の下から現れた
顔はカリフラワーみたいに真っ白さ
　血も骨もないんだから

男は葦笛を口にあて
　そりゃあきれいに吹き始めた　50
灰色のシギや　黒い雄鶏がやってきて
　笛の音に聴き惚れた

笛の音は緑のローモンドに鳴り響き
　その美しさに夜風もぱたりとやんだ

笛の音はリーヴェン湖に鳴り響き　55
　白いカモメも目を覚ましたのさ

高くてきれいな笛の音が
　緑のローモンドに鳴り響いて
イタチは土の穴から飛び出して
　真夜中の丘で踊り狂ったのさ　60

カラスはこちらを盗み見しながらやってきた
　ワシは低く　くるくる飛び回った
マスも笛の音にすっかり聴き惚れて
　リーヴェン湖から飛び出したのさ

海を朝日が照らすまで　65
　あたしらは緑のローモンドの丘で踊り狂ったのさ
お前さんの顔を見るまでは
　疲れたなんてちっとも思っていなかった」

「それがどうした　気味の悪い女房(やつ)め
　それがどうしたってんだ　70
かわいい赤ん坊や俺といっしょに
　家で寝てりゃいいものを」

「二日目の晩　空には新月が細くかかり
　あたしらは猛(たけ)る海を越えてった
トリガイの舟に身を任せ　75
　ヘンルーダの帆で風を受けたのさ

風はうなり　鬼火が飛んで
　海は天を突くように大荒れさ
雷が鳴り　アザラシが吠えるなか
　舟は飛ぶように進んでった　80

海と同じ緑色した丘を登って
　あたしらはついには天の雲を抜けてった
そして激しい稲妻のように
　蒼い天の窓から真っ逆さまさ

それでも索具(さくぐ)は揺るがず　舟は無傷　85
　ただ貝の艫(とも)は苦しそうにきしんでた
波の上を越えられない時は
　波の下をくぐってった

雹(ひょう)みたいに速く　疾風みたいに速く
　真夜中の稲妻みたいに速く　90
荒れる大波を突っ切って
　泡立つ波を蹴散らしてやったのさ

ノルウェーの岸辺にたどり着くと
　風の馬に乗り換えた
波を蹴散らし　森を縫い　95
　後に残るのは飛沫(しぶき)だけ

緑のローモンドのノロジカの足は速く
　狩りをするグレイハウンドの足も速い
猟犬と角笛に追い立てられたら
　こげ茶のトナカイだって走れるさ　100

でもノロジカもトナカイも
　アカジカも猟犬も
あたしらの美しい馬のように
　山や野や谷を越えることはできやしない

谷は深く　ドフリニの山は険しい　105
　あたしらは天まで駆けた
溶けることのない雪の上のあたしらの行く道は
　足跡もなくどこまでも白かったよ

ラップランドの丘に着くころには
　妖精たちが勢ぞろい　110
北の小鬼たちが
　祭りに集(つど)っていたからさ

魔法使いも魔女たちも

　森や山の妖精もやってきた
猟犬の亡霊も　115
　海の人魚もそろってた

皆であたしらを魔法の水で清めた
　荒野に降りる露を集めた水さ
森に咲くラップランドの野バラのように
　すっかりきれいになったのさ」　120

「嘘だ　嘘だ　この嘘つき女め
　よくもぬけぬけと大嘘を
ファイフで一番の不細工な女房だって
　お前さんに比べりゃ器量よしだ」

「人魚たちはうたい　森にこだました　125
　歌はきれいに鳴り響いた
すべての崖に琴(ハープ)をつるし
　すべての木々に竪琴(リラ)を響かせた

人魚たちはうたい　森にこだました
　あたしらはしこたま飲んだ　130
やがて魔法使いたちの腕にやさしく抱かれて
　あたしらは深い眠りに落ちてったのさ」

「出ていけ　出ていけ　この売女(ばいた)め
　ひどい仕打ちを受けるがいい
神の前でそんなことをぬけぬけと言う女房(やつ)が　135
　亭主に誠実なはずがない」

「あたしらは妖精の群れから
　あたしらの本当の主人から
空を飛ぶ呪文や
　閂(かんぬき)や鍵を開けたりする呪文を教わった　140

昨晩あたしらはメイズリーの小屋に集まると
　その呪文を教わって
黒く曲がった貝に足をのせ

　その小屋の煙突から飛び出したのさ

丘を越え　谷を越え　145
　泡立つ波の上を飛んでいった
ついには美しいカーライルに着くと
　草原に降り立った

塔の向こうの酒蔵に向かい
　風のようにやすやすと中に入った　150
そこで司教様の美酒(ワイン)を浴びるほど
　嫌と言うほどたっぷり飲んだ」

「その話が本当なら
　かわいい俺の女房よ
この世でもあの世でも　155
　きっとお前と添い遂げよう

次に陽気なカーライルに
　血のように真っ赤な美酒(ワイン)を飲みに行く時は
ちくしょうめ　お前と一緒に俺も行こう
　たとえ後ろに悪魔が飛ぼうとも」　160

「ああ　ばかだねお前さん
　どんなに危ないのか　ちっともわかっちゃいない
昨晩　司教様の美酒(ワイン)を飲んでるときに
　すんでのところで捕まるところだったんだよ

サンディ浅瀬(フォード)に着く前に　165
　ライチョウが足元を飛んでいた
エトリック畜舎(ペン)の高い屋根飾りが
　青い空に揺れていた
空を縫って進む間に
　冷たい朝露が降りてきた　170

ブレイドの丘の上を飛んでいる時に
　きれいな太陽が昇ってきた
そこへ不機嫌なジェイムズときれいな奥方が

　　鹿狩りに現れた

二人が弓を構えて矢を放ち　　175
　　空を鋭く切り裂くと
臭くて真っ赤な魔女の血が
　　朝露を赤く染めたのさ

ああ　ばかだねお前さん
　　どんなにあぶないのか　ちっともわかっちゃいない　　180
お前さんのもとに帰るのに
　　くたくたになったというのにさ」

「呪文だけでも教えておくれ　かわいい俺の女房よ
　　さあ早く教えておくれ
とびきりの美酒（ワイン）をいただきたいんだ　　185
　　お前と一緒に空を飛びたいんだ

ひどい馬には乗りたくないし
　　嵐の中　波にもまれるのもごめんだが
お前と一緒に空を飛んで
　　酔いつぶれるまで飲みたいのさ」　　190

「お前さん　ばか言っちゃあいけないよ
　　呪文なんて教えるもんか
世の中がひっくり返って
　　地獄よりもひどくなっちまう

国中の女たちが　　195
　　風に乗って空を飛び
男たちは上着を脱いで
　　女の後を追っかけるようになっちまう」

それでも　老いぼれ亭主はずるがしこくて
　　あれこれ策をめぐらしました　　200
幾晩も用心深く見張りを続け
　　魔女たちが飛び立つのを待ちました

ある晩　亭主がメイズリーの小屋に隠れていると
　怖いもの知らずの魔女たちがやってきました
亭主は恐ろしく奇妙な呪文を耳にもし　205
　罪深い行為を目にもしました

皆は火のそばにさっと集まって
　一人ずつ呪文を唱えました
それから黒く曲がった貝に足をのせると
　煙突から飛び出しました　210

老いぼれ亭主は恐れ慄(おのの)いて
　物影から這い出てきました
でも後悔なんぞありません
　思うのはただただ美酒(ワイン)のことばかり

亭主は黒く曲がった貝に片足をのせました　215
　片目を一点に据え　もう一方は見開いて
口にするのも恐ろしい呪文を唱えると
　煙突から飛び出しました

魔女たちが青白い月あかりの中昇っていくと
　震える風は大きなうなり声をあげました　220
でも誰ひとり気がつくものはありません
　後ろから老いぼれ亭主がついてきているなんて

カーライルの酒蔵にやってきて
　風のようにするりと中に入りました
司教の美酒(ワイン)を　225
　嫌というほどいただきました

老いぼれ亭主は気が大きくなって
　かび臭い床で踊ると
ファイフの流行(はや)り歌を次々うたい
　周りの魔女たちと酒池肉林の大さわぎ　230

亭主は次の大樽をあけると
　一気にぐいぐい飲み干しました

そのうちに亭主の瞼は重くなり　声は低くなり
　呂律はまわらなくなりました

魔女たちは司教の美酒(ワイン)を飲むうちに　235
　朝風の薫(かお)りを嗅ぎつけました
そこでやすやすと風を切って飛び立ち
　老いぼれ亭主を置き捨てました

じめじめとした床の上　亭主はぐっすり
　大きないびきをかいて眠りました　240
家から遠く離れているなんて
　女房に置き去りにされたなんて夢にも思いませんでした

じめじめとした床の上　亭主はぐっすり
　午後(ひる)まで眠りました
五人の荒くれイングランド人たちに起こされて　245
　陽の照る外へ引きずり出されました

「お前は一体何者だ　このろくでなしの老いぼれめ
　こんなところでぐっすり寝やがって
司教様の酒蔵にどうやって忍び込んだんだ
　鍵をかけ鉄の閂(かんぬき)を下ろしていたのに」　250

老いぼれ亭主は話そうとしましたが
　なんとも言葉が見つかりません
頭を働かせようとしましたが　ぐるぐる眩暈(めまい)がするばかり
　良策は一つとして浮かびません
「ファイフから来たのさ」　亭主は叫びました　255
　「真夜中の風に乗ってきたんだ」

男たちは亭主に切りつけ　亭主を突きさし
　亭主の手足をムチで打ち据えました
そのうち赤い血が亭主の靴下と靴まで滴りましたが
　誰かがワインが流れてきたと囃(はや)しました　260

男たちは亭主を殴り　亭主を突きさし
　それから石に縛り付けると

周りに薪を積みました
　骨と皮まですっかり燃やそうというのです

「ああ　なんてこったい」哀れな亭主は嘆きました
　「まさかこんな目に会うなんて
哀れな男どもを惑わせる
　悪い女どもに呪いあれ

この先　老人が
　欲にかられて罪を犯しませんように
この先老いぼれ男が
　酒飲みたさに悪魔の後を追っかけたりしませんように」

煙が老いぼれ亭主の顔まで昇り
　亭主は息が詰まりました
怒りの炎は巻き上がり
　亭主のズボンの膝を焦がしました

亭主はこれで見納めと
　故郷（くに）の方へ目をやりました
家に残す小さな赤ん坊のことを思いました
　ああ　何と哀れな老いぼれ亭主

その時　皆は顔を太陽に向けて
　びっくり仰天
何か黒々とした大きなものが
　空を切ってやってきたのです

一羽の鳥がファイフの地から飛んできました
　まさに間一髪というこの時に
亭主の死を見届けようとやってきた
　亭主の女房に違いありません

鳥は亭主の頭に赤い帽子をかぶせました
　亭主は喜んだように見えました
鳥は亭主の耳に何か一言ささやくと
　また空へと飛んでいきました

亭主は燃える炎の中で
　ひょいと体を動かしました
すると薪に亭主をつないでいた枷(かせ)は　295
　まるで紐のようにするりと落ちました

亭主は息を吸い込むと
　何とも嬉しそうに呪文を唱えました
燃えさかる薪に足をかけると
　空へと飛び上がりました　300

亭主は渦巻く煙を払いました
　怖がっているようにも残念そうにも見えました
でも明るく青い空に飛び立つと
　気が狂ったように笑いだしました

両腕を広げ　顔をあげ　305
　足を後ろに突き出しました
亭主の上着のひだは
　風にパタパタはためきました

こんなに愉快なことはめったにないと
　亭主は笑いながら飛びました　310
笑いながら空を飛ぶその声は
　まるで青い雁(がん)のようでした

亭主は北へと向かうその途中
　カーライルの男どもを見下ろしました
会釈をし　にやりと笑みを浮かべましたが　315
　さよならなんて言いません

カーライルの男どもは蒼くかすんだ空の向こうに消えました
　もう人々に亭主の姿は見えません
亭主の大きな笑い声だけが大風に乗って
　いつまでも長く大きく響きました　320

ファイフのすべての人々が

この酒飲みの老いぼれ亭主の物語を読みますように
たとえ女房が魔女であっても
古女房を呪いませんように

（鎌田明子訳）